いま登山者にもとめられること

トムラウシ山遭難

「大雪山系　死の行軍」
「日本百名山キバをむく」

週刊誌の記事の見出しだ。テレビや新聞でも連日取り上げられ、死者10名を出し、夏山史上最悪となった大雪山系での遭難事故は、山に登らない人々の関心も高かった。

フリークライマー平山ユージさんのワールドカップ総合優勝（98年・00年）、同じく先日の野口啓代さんのワールドカップ総合優勝、山野井泰史さんら世界的アルパインクライマーによる先鋭の登山や、第17回ピオレドール賞を受賞したカランカ北壁初登攀（一村文隆さん、佐藤裕介さん、天野和明さん）、カメット南東壁初登攀（平出和也さん、谷口けいさん）など、世界に誇れる日本登山界の朗報は取りざたされないだけに残念だ。

今回の事故は、自分の力ですべてをこなす正統派登山の枠を越え、中高年登山ブームにはじまる登山の大衆化・多様化によって、登山行為がビジネスとして成立する時代の問題点を浮き彫りにするものであった。

遭難事故の現場
大雪山・トムラウシ山

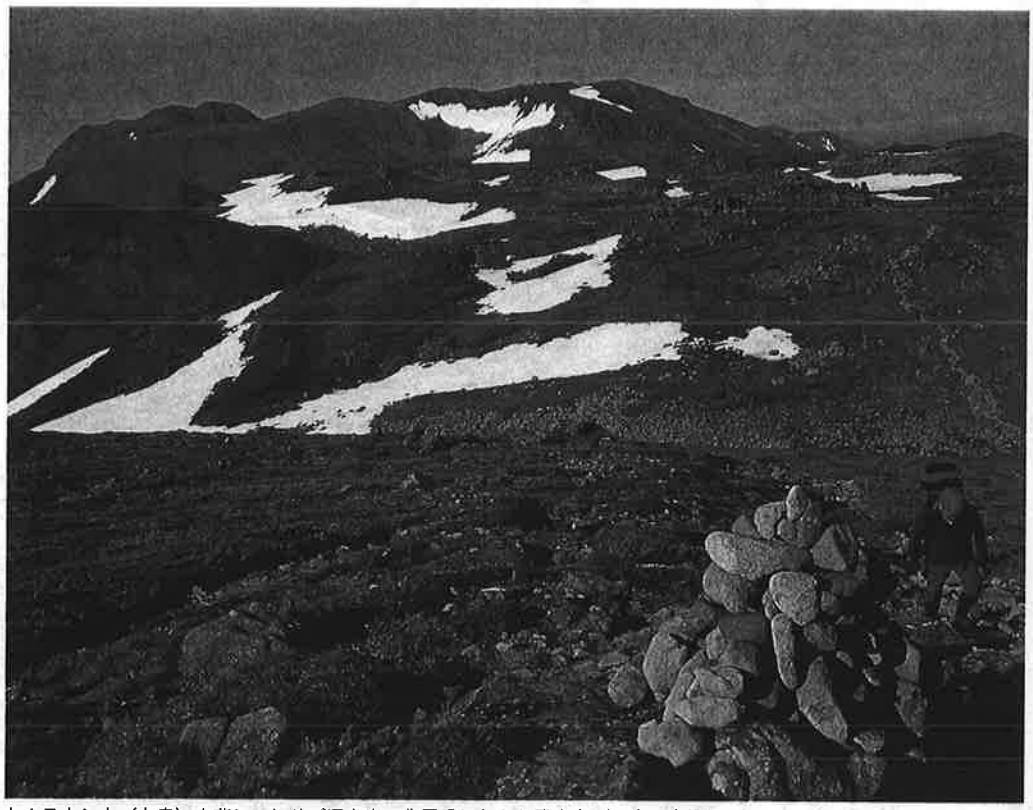
7月16日、死者9名を出したトムラウシ山は、北海道のほぼ中央に位置する大雪山連峰にある。アイヌの人々に「ヌタクカムシュペ（一説に、河の廻流する所にたっている山）」と称せられ、古くから「カムイミンタラ」神々の遊ぶ庭、と呼ばれ愛されてきた大雪の山々は、広く、たおやかで、大きい。

噴気活動をいまも行っている北海道最高峰の旭岳は標高2291㍍、トムラウシ山は標高2141㍍。どちらも深田久弥の日本百名山に選ばれた大雪の山である。標高こそ日本アルプスに及ばないが、のびやかな山肌いっぱいに咲き乱れる高山植物群は、いつ見てもすばらしい。大雪の山々では標高1700㍍で高山植物を見ることができ、永久凍土や雪田（雪渓）が残ることなどから、花々の種類が多いことでも知られている。

なかでも、トムラウシ山にあこがれる登山者は多い。表大雪の山々のなかでひときわ特徴的な山容をもち、自然が豊かで奥深いからだ。ヒサゴ沼をはじめとしてたくさんの池沼、咲き乱れる花々に彩られるようにしてトムラウシ山は鎮座する。旭岳のように、ロープウェイという人工物を使って、安易に踏み込める山ではない奥深さが、トムラウシ山の魅力だ。

そんなトムラウシ山に、憂うべき話が浮上した。今回の遭難事故を機に、トムラウシ山に新たな避難小屋建設の話が持ち上がったことだ。

ここでは、夏山史上過去最悪といわれる遭難事故の検証を行いながら、山に登るということの意味、そして避難小屋建設について考えていきたい。



トムラウシ山（左奥）を背に、ヒサゴ沼を出て化雲岳にむかう登山者（写真・高桑信一）

本報文は、山岳雑誌「岳人」編集部及び筆者；岩城史枝氏の許可・承認を得て、
「岳人」（東京新聞出版部）2009年10月号より転載したものである。

事故までの行動概要

ツアー参加者	ガイド	メインガイド（北海道32歳・Mガイドと表記）サブガイド（愛知38歳・Sガイドと表記）ガイド兼ツアーチーフ（広島61歳・Tガイドと表記）ガイド補助（ネパール60歳） ※引率ガイド３人のうち、Mガイドが３年前から夏だけの契約社員、２人はアミューズトラベル社と契約を交わした専任ガイド（うちTガイドが日本山岳ガイド協会認定のトレッキングガイドだが旧認定のガイド）。山行中はメインガイド、ツアーチーフがしきる。
	ツアー客	戸田新介（愛知65歳）前田和子（広島64）真鍋記余子（静岡55）男性客Ａ（岐阜69）男性客Ｂ（広島64）男性客Ｃ（山口61）男性客Ｄ（愛知66）女性客Ｅ（宮城68） 女性客Ｆ（広島61）女性客Ｇ（広島62）女性客Ｈ（愛知68）女性客Ｉ（静岡59）女性客Ｊ（愛知62）女性客Ｋ（愛知69）女性客Ｌ（岡山64）

日にち	行動の時刻	パーティーの行動	ツアー参加者への質問（天気、雨具などの衣服や食糧など）
７月13日(月)	13時30分頃・	新千歳空港で各地から集合した客とガイドらが合流、バスで出発する。途中で登山用品店、コンビニに立ち寄る。	
	17時00分前・	旭岳温泉白樺荘に到着。ガイドは、テレビの天気予報を見て、翌日14日の天候は良いが15、16日は崩れると予想。	
７月14日(火)	６時00分・晴れ	上川管内東川町旭岳温泉の宿を６時に出て、６時10分頃旭岳ロープウェイ駅に到着ロープウェイに乗車して姿見へ。６時30分頃にガイド３人、ガイド補助１人、ツアー客15人の計19人で歩き出す。	**Q＝14日の天気はどうでしたか？　何を着て歩きましたか？** **戸田●**晴れていたが、遠くの山にガスがかかり、時々山頂が見えるような天気。普段は春夏用の長そでシャツ（モンベルのジオライン３Ｄ・ポリエステル100％）のみ。この日はゴアの雨具の上を着用した。下は、トランクス、サポートタイツ（ＣＷＸ）、登山用ズボン。 **前田●**晴れていたが肌寒く、いつもは長そで１枚（ノース・フェイスのジップアップ式シャツ・ポリエステル100％）で歩くが、防寒着の1つに持参した薄手のジャンパー（夫のお古のゴルフ用ウインドブレーカー）をはおって行動した。下は、登山用ズボン、サポートタイツ（ＣＷＸ）。 **真鍋●**晴れていたが肌寒いので雨具をはおった。着ていたのは、山用の長そでのハイネックシャツ（ポリエステル97％、ナイロン3％）の上に半そでのTシャツ（ポリエステル100％）。下は、登山用ズボン（ナイロン、アクリル、ポリウレタン、毛）、サポートタイツ（CWX）。下着も山用（ポリエステル、ポリウレタン）。行動中はTシャツの脱ぎ着で温度を調節している。 **Q＝白雲岳避難小屋での夕飯は何を食べましたか？** **戸田●**レトルトのカレー、レトルトの御飯（半分残す）、紅茶。 **前田●**２食分入りα化米パックの半分、コーンスープ、お肉のソーセージ、きなこ棒２本。16時には食べていた。あとサプリメント、アミノバイタル。 **真鍋●**弁当の残りのおむすび１個とおかず、フリーズドライの味噌汁、キュウリ、トマト。
	９時00分・晴れ	９時に旭岳着。天気は良かったが、遠くの山の頂には雲がかかっており、トムラウシ山頂は雲の切れ間に時々見えた。地獄谷からの風があって肌寒く、雨具の上着を着用している人がほとんどだった。間宮岳、北海岳を経由し、白雲岳を往復してから白雲岳避難小屋に向かった。行動途中で体調が悪くなり吐いている女性客がいた。	
	14時45分頃・晴れ	白雲岳避難小屋に到着。16時頃、ガイドが沸かした湯を利用して各自夕飯を作って食べる。戸田が17時頃に外のベンチで夕飯をとっていたときは雨の気配はない。ガイドは、携帯電話の天気サイトで上川地方の天気図を確認。翌日の午後に寒冷前線が通過して雷の心配がある、と出発時間を30分早めた（アミューズトラベル社の遭難事故の経過より）。19時消灯（消灯時間はとくになかったが、戸田は19時には寝ていた。前田は普段から山では19時には横になるように心がけている。ほとんどの人が19時頃には就寝していた）。	
	夜中・雨	雨が降りはじめる。	
７月15日(水)	３時30分頃・雨	起床。	**Q＝白雲岳避難小屋での朝食は何を食べましたか？** **戸田●**インスタントラーメンの冷たくなったもの（前日に朝食を作っておくようにガイドがいうから）。 **前田●**昨夜の残りのα化米、ワカメスープ、お肉のソーセージ。 **真鍋●**α化米、フリーズドライのスープ。 **Q＝あなたの雨具は？** **戸田●**登山店で買ったゴアの雨具上下で３年ほど経過。防水性は少し弱くなっているかも。 **前田●**登山店で買ったゴアの雨具上下。長期山行は、いつも夫のLLサイズを持参する。そでが長いから雨が降っても手がすっぽり覆えるため冷えを防げる。それでも今回は下山したら左手がしもやけになっていた。この日はサポートタイツの上に直接雨具をはいて歩いた。 **真鍋●**登山店で買ったゴアの雨具上下。購入して３年目くらい。専用の洗剤と防水機能を持つニクワックスを時々使用。ひざ下丈のゴアのスパッツも使用した。折りたたみ傘も持参。 **Q＝15日の天気は？** **戸田●**強く降ることはなかったが、全身がくまなく濡れる雨で、霧雨のような雨。メガネの外側に水滴がつき、内側は曇った。小川のような登山道で靴がグズグズに濡れた。 **前田●**ザンザン降りではなく、細かな雨粒のしとしと雨。全身びしょ濡れ。水滴と曇ったメガネに足場がよく見えず、歩きにくかった。 **真鍋●**苦にはならない程度の雨で、視界があった。振り返ると時々旭岳の山腹がガスの合間に見えたりもした。
	５時00分・雨	雨具上下を着て出発。風はほとんどない。忠別岳、五色岳の山頂を経由し、化雲岳は登らずに巻いてヒサゴ沼避難小屋に降りる。土が流されて深く掘れてしまった登山道には水溜まりが多く、道を選んで歩くため時間がかかり、調整のため休憩時間を１回５分と短めにした。この日、ほとんどの人の靴が濡れた。	
	14時30分頃・雨	ヒサゴ沼避難小屋に到着する。２階には静岡からの６人パーティーと、旭岳に北上する夫婦連れがすでにいたため、ツアー一行は１階を使用する。先行者が濡れた衣服を着替えたためなのだろうか１階の床は濡れていた。避難小屋に到着した後は、着替えたり、濡れたものを干したりと忙しく過ごし、ガイドの沸かしたお湯等で各自夕食を作って食べる。翌日の天気について、前日の天気予報から、午前中までは崩れるが午後からは大丈夫とMガイドは予想する。	
	19時00分頃・雨	ほとんどの人が就寝。このころも雨は降っていたが、トイレに出たときなど多少濡れるくらいで、びしょ濡れになる雨ではなかったため、前田は手洗いに沼まで足をのばした。濡れた衣服や装備は頭上や足上に干して寝たが、水滴が落ちてきたりした。また、濡れたシュラフに入って寝た人もいたようだ。	

14日は晴れていた。旭岳にて。写真提供・戸田新介

Q＝行動中に食べたものは？
戸田●パン（チーズ入り１つ、あん入り１つ、チョコ入り１つ）。
前田●大福１つ。こまごまとしたもの（小豆キャラメル、ハッカ飴、塩飴、梅昆布）。
真鍋●パン１個、ウィダーインゼリー、ソイジョイ1個、チョコ3個、飴2個、ナッツ類、蜂蜜。
Q＝雨のなか行動して、衣服や荷物は濡れましたか？
戸田●下着までずぶ濡れ。靴も。靴下はしぼれるほど。サポートタイツも脱ぎ、下着まですべて着替えたが、「着干しする」といっていた人もいた。シュラフが半分ほど濡れた。
前田●全身濡れ、靴下もしぼった。女性はお互いに目隠しをして着替えた。私は下着以外を全部着替えたが、その後下着も脱げばよかったと後悔した。ザックの底に入れておいた防寒着のフリース（中厚手）が行動中に濡れてしまった。反省している。
真鍋●シャツとサポートタイツは濡れたが下着は湿った程度。上半身全部着替え、サポートタイツも着替えた。靴と靴下は濡れたので、靴下は履き替え、靴には新聞紙を入れて一度取り替えたら朝は少し湿っている程度に。ザックの中の荷物は袋に入れていたので濡れていなかった。
Q＝ヒサゴ沼避難小屋での夕食は何を食べましたか？
戸田●レトルトのカレー、レトルトの御飯。
前田●２食分入りのα化米半分、スープ、お肉のソーセージ、きなこ棒２本。
真鍋●α化米、フリーズドライの味噌汁、汁粉、キュウリ、トマト、ホタテの干物。

7月16日(木)	3時30分・雨と風	起床。
	5時30分・雨と風	5時出発の予定であったが、天候悪化のため少し待機したのち、5時30分に出発する。出発時、何人かの客は外の様子を見て出発することに不安を感じたという。また、行動するのはやめたほうがいいのではないかという客からの声もあったという（戸田・前田・真鍋ともにトイレ等で席をはずしていたときなのか聞いていない）。沼ノ原から登ってくる自社のツアー用に、10人用テント、コンロ、ガスカートリッジ、鍋などの山行装備を小屋に置いてツアー一行は出発する。
		出発後すぐに今山行ではじめてアイゼンをつける。手間取っている客らにガイド補助がアイゼンをつけてまわる。ガイド補助は空身で雪渓上部まで同行し、次の客の場所取りのためと、装備品の管理のために避難小屋に戻る。ここからツアー客15人＋ガイド3人になる。稜線にあがると風は強くなったが、まだ歩けないほどではなかった。天沼手前と天沼付近で５分ほど休憩する。 天沼を過ぎ、日本庭園に差し掛かりはじめると非常に風が強くなる（クワウンナイ川源流部からの風）。木道のあるあたりが特に強烈な風。ロックガーデンまで風速毎秒20～25mの強風にまともに歩けず、立っていられずに転ぶ人が続出する。先頭をゆくMガイドの声が全員に届かない。真ん中あたりにいたSガイドが「風が強く吹いたらしゃがんで」と繰り返した。このときの推定気温は７～10度。このあたりから客の歩行状態にばらつきが出はじめる。
	8時30分頃・	ロックガーデンに到着。ヒサゴ沼からここまで通常の参考タイムは1時間30分ほどだが、倍の約３時間かかる。
	10時30分頃・	通常の参考タイムはヒサゴ沼から２時間30分であるが、約５時間あまりをかけて北沼に到着する。降雨により北沼からあふれた水が幅２mほどの川となって登山道を横切っていたため、パーティーのうち何人かがMガイドとSガイドの助けを借りて流れをわたる。女性客がふらついた拍子に、Sガイドは転倒し全身を濡らす。徒渉に躊躇する女性客もおり、Mガイドが少しでも渡りやすそうな場所を探して徒渉させるなどする。全員が渡るまでにかなりの時間を要した。

Q＝よく眠れましたか？
戸田●買い物用ビニール袋１枚にパッキングしておいたシュラフが半分ほど濡れていたため、持ってきたシュラフカバーを濡れたシュラフの中に入れて寝た。全身着替えたこともあり、快適にぐっすり寝られた。一度目が覚めた２時頃、風の音がすごかった。
前田●シュラフはまったく濡れていなかった。足下までカバーする全身用エアマット（サーマレスト）を敷いて寝た。靴下の替えがなく素足で寝たが熟睡できた（山ではいつも睡眠導入剤使用）。１階は狭く、２階で寝てもいいといわれて上で寝たが、２階は暖気が上がっていたためか１階よりも暖かかった。
真鍋●シュラフは濡れてないが、床が濡れていたのと窓際からの吹き込みでよくは眠れなかった。前日のほうが眠れたが、今回は避難小屋泊まりということで、快適には眠れないだろうとくる前から覚悟してきていた。夜中の１時ころから雨と風が強くなった。

Q＝ヒサゴ沼避難小屋での朝食は何を食べましたか？
戸田●袋入りのラーメン。この日は温かいものを食べた。
前田●２食分入りのα化米半分、スープ、お肉のソーセージ、サプリメント、アミノバイタル。
真鍋●α化米、フリーズドライのスープ。
Q＝ヒサゴ沼避難小屋を出るときの天気は？
戸田●どちらかというと雨よりも風が気になる感じだったが、最終日だし出発すると思っていた。出発予定の５時前、トイレから帰ってきて、横で寝た男性に出発が30分のびたと聞いた。
前田●起きたとき雨はひどくなかった。どちらかというと気になるのは風の方、というくらい。出発するときも同じような天気。２階で準備していたので、出発前の１階でのやりとりはよく聞こえなかった。５時30分に出発がのびた、というのは聞こえた。
Q＝何を着て出発しましたか？
戸田●初日（上記参照）と同じ服装に上下雨具。日本庭園の手前あたりで、歩いているときに前に出てザックからフリースを出して１枚足した。
前田●昨日の濡れたシャツは着ないで、着替えて寝た服装で（ポリエステル100％の長そで）。フリースを着たかったが濡らしてしまっていたため、温泉宿でもらったタオルに首が出るように切れ込みを入れてかぶり、ウインドブレーカーを着た上に雨具。
真鍋●昨日濡れて脱いだものは着なかった。初日と同じような服装に上下雨具。北沼をわたる前か、後かの記憶が定かではないが、行動中（休憩の声はかかっていない。徒渉の待ち時間だと思う）に風雨の中でフリースを１枚着た。

	北沼の徒渉を終えたすぐ先の分岐で女性客Hが（低体温症のため）歩行困難になり、ガイドの声にも反応はほとんどなく、声も出なくなる。ガイドたちはその客にかかり切りのような状態になり、パーティーは風雨にさらされて１時間30分ほど待つことになる（北沼の徒渉待ち時間含めてか？）。座り込んだ人の前に誰だか３人が並んで風よけを作るなどしていたが、ほかの客から「寒い寒い」という声や奇声をあげる女性客らも出はじめ、状況を見て戸田は「このままではよくない」と誰に言うともなく大きな声を出して一喝し、救助要請を口にした。	**Q＝出発してから北沼あたりまでの天気は？** **戸田●**とにかく風が強かったのは日本庭園の先からロックガーデンのあたりの木道のある場所。強風地帯に差し掛かる前、歩いているときに前に出てフリースを着た。雨具を脱いだときに乾いている服が濡れてしまうのが嫌だと思ったが、着たことで体が楽になった。 **前田●**日本庭園あたりの木道の風がすごかった。しゃがんで木道の端をつかんでいた。風が少し弱まったときに横移動した。北沼の水面が波打っていた。 **真鍋●**稜線に出てから風雨が強くなり、吹き飛ばされそうなときはしゃがんだ。トムラウシに向かう途中の登りでは、水が勢いよく流れてきて沢登りをしているようだった。行動中に風雨の中でフリースを１枚着た。ザックの上の方に入れておいたので出しやすかった。中の方に入れていたとしたら、あの風雨の中では出せなかったのではないかと思う。 **Q＝北沼のあふれた水をわたるとき、どこが濡れましたか？** **戸田●**列の真ん中あたりにいたが、自分が渡るときの水位は15cmくらいか。靴のかかと上部から水が入ったのを感じた。トムラウシの斜面から滝のようになって北沼に水が流れているのが見えた。ゴアのロングスパッツを着用していた。 **前田●**列の最後を歩いていたが前が進まず、流れの中で待っていて濡れてしまうよりは素早く渡ってしまおうと思い、列の横を抜けて渡った。水位はひざ下。かなり流れがあった。 **真鍋●**どちらかというと列の後ろの方だった。足のくるぶしくらいまで水につかって渡ったと思う。ひざ下まであるゴアのスパッツを着用していた。Mガイドにしがみついて渡った。 **Q＝避難小屋から北沼の先での長い待ち時間までの間に何か食べましたか？** **戸田●**アミノバイタル3袋、カロリーメイトを2種類×2箱。出発前にポケットに入れておいた。 **前田●**ポケットに入れておいた細々としたもの（キャラメル、塩飴、梅昆布など）。 **真鍋●**ウィダーインゼリー、ソイジョイ１個、バナナ、チョコ３個、ナッツ類。ザックのウエストベルトにポケットがあり、普段からそのポケットに細々した食糧を入れていて、お腹が減ったときには食べるようにしている。
12時30分 ～13時頃・	救助要請の声に、Mガイドは歩ける人だけで先行すると言い、動けなくなった女性客に付き添いのTガイドとSガイドを残してパーティーは先に進む。歩き出してまもなくの雪渓手前でMガイドが人数を確認すると客2名が足りなかったのだが、最後尾にSガイドがいた（Sは女性客を追いこしたのか？）。MガイドはSガイドに、少し先に風がしのげる場所があるので本隊はそこで待つように指示して、Mガイドは北沼分岐付近に戻る。残っていた女性客2人を1人ずつ背負って雪渓を登ると、女性客1人と介護している男性客Aがいた。Mガイドは、2～3分先にいた本隊に追いつき、行動不能の人はビバーク、Sガイドは動ける客を連れて下山するように指示をした。意識不明になった女性客1人、歩行困難になった女性客２人、付き添いの男性客A、Mガイドがビバークすることになる。また、ここで再度救助要請の要望が客から出るが、Mガイド率いるビバーク組とSガイドが率いる本隊とに分かれる。	
	Sガイドと客10人はトムラウシ山頂を西側のルートから巻いて下山を開始する。MガイドがSガイドに分岐では点呼するように指示していたが、Ｓガイドは途中で後続者の人数を確認することなく、速いペースで進む。そのため次第に11人のうちSガイド含む３人が先行、残りの客８人がついて行けず遅れはじめ、トムラウシ分岐の時点ですでに本隊はばらばらであった（無我夢中でSガイドについて歩いた客含め、客は点呼を聞いていない）。	
	そのころ、北沼付近でビバークを決めたMガイド、客4人（女性3人・男性1人）のうち、女性客1人がツェルトに入ってからしばらくした後、脈拍が停止する。	
13時30～50分頃・	トムラウシ分岐手前５分ほどのあたりですでに本隊から２人離れる。ふらついた男性客Dを男性客Cが介護していたためだが、Dが意識をなくしたので男性客Cは歩き出す。途中に動けない状態の女性客２人がいて介抱したが、その甲斐なく意識をなくしたため男性はその場を離れる。さらにトムラウシ公園に向かって行くとシュラフに包まれた女性客Lと付き添う女性客（真鍋）と会う。真鍋は元気そうに見えたがこの場を離れたくないと話し、無理強いはせず男性客Cは下山を続ける。	**Q＝北沼の先～下山する（救助される）までの間に、何を食べましたか？** **戸田●**下山を開始してからはほとんど食べなかった。水もあまり飲まなかった。夜1時半にビバークしたとき、ザックからカレードーナツを出して1個食べた。 **前田●**カロリーメイト1本（１本はガイドにあげた）、きなこ棒、アクエリアスを飲んだ。顆粒のアミノバイタル３、４袋をSガイドが一気に飲もうとしたので、1袋もらった。 **真鍋●**16時頃、トムラウシ公園よりも上だったと思うが、登山道から少し入った草むらでチョコを食べた。それから18時頃にパン（ワッフル）、チョコ、羊かんを、朝3時過ぎに、パン（ワッフル）を食べて下山をはじめた。１時間半ほど歩いたところで救助された。 戸田氏の山行中の食事
15時00分・	本隊のうちSガイドと女性客（前田）が前トム平に到着。Sガイドが後続を気にする様子は特にない。雨は上がっており、風も弱まっていたが霧で視界が悪かった。前田はこの前トム平以降、持参した地図をみても現在地がどこか分からなかったという（前トム平には立派な標柱あり）。	
15時54分・	前トム平からコマドリ沢分岐に向かう途中、岩場などでSガイドが何度か座り込んだので前田が「あなたも子どもがいるんでしょう。頑張りなさい」などSガイドを励ます。15時48分、前田の夫から携帯電話に着信があり電話が通じることがわかる。Sガイドに頼まれて前田がこの山行で最初の110番通報を行う。警察に現在地を聞かれたが答えられなかったためSガイドに代わったが、疲労のためかろれつが回らない状態であった。携帯電話の電池が会話の途中で切れては電池を暖めてを3～4回繰りかえす。Sガイドはツアー会社名等名乗ることはなく、自分のことなのか「ポーター」という言葉を何度も口にする。完全に電池が切れた後、Sガイドに携帯を出すように何度も言う。前田と男性客Bが早く電話をかけてと何度言っても、誰と話すわけでもなく指で番号をずっと打っていた（メールか？）。	

	16時～18時前頃・	トムラウシ公園手前にいた真鍋は、自分のシュラフをかけて介抱していた女性が冷たくなり、座っていたためか自分の体力は回復していたので下山を考える。しかし、いまから下りてもすぐに暗くなり、道迷い等懸念されるため、ヒグマが気にはなったが登山道から５～10mほど入った草むらでビバークを決める。意識のなくなった女性の荷物からシュラフを出して彼女にかけ直し、早朝の下山に備えて自分のシュラフとマットに横になる。翌日の３:28に歩き出す。
	16時30分・	Sガイドは歩くことができなかったので、前田は追いついてきていた男性客Bとともに、その場にSガイドを残して下山を開始する。
	17時00分前・	Mガイドが、ツェルト（男性客Aの私物）まで様子を見に行くと、そこに入っていた女性客HとTガイドは絶望的な状況であった。Mガイドは南沼キャンプ地方面に歩き、携帯の電波が入る場所を探し、アミューズトラベル社に、「すみません。７人下山できません。救助要請します」、「4人くらいだめかもしれないです」といった内容のメールを16時49分に送信する。その先少し歩くと男性客Dがうずくまっていた（意識は未確認か？）。さらに先に青いビニールシートの塊があり、中にテント、毛布、ガスコンロを見つけた（のちに登山道整備業者が非常時用に残していた装備品と判明）。Mガイドは倒れていた男性客に毛布をかけてビバーク地へ戻り、拾ったテントを付き添いで残った男性客Aと立て、お湯を沸かす（それまでは、男性客の持参したコンロ類などが使われていた）。その後、介抱されていた女性客１人がいびきをかきはじめるとともに体温が下がってゆき、意識が遠のいたため、男性客らがほおをさすり、名前を呼び、「頑張って」と声をかけたが脈がなくなる。Mガイドが心臓マッサージをしたが、意識は戻らなかった。
	17時00分前後・	15時54分の110番通報を受けてヘリコプターによる捜索を開始するが、悪天候による視界不良のために40分ほどで捜索を断念。
	19時10分頃・	Mガイドは飲料水確保のため南沼方面に行き、携帯電話でアミューズトラベル本社松下政市社長と、（その後に警察と？）話す。
	20時30分頃か・	ビバーク中のMガイドが携帯電話で新得署に連絡、女性客らが意識不明などの状況説明をする。その際、生死不明の男性１人が近くに倒れているのを目撃したことも伝える。
	22時00分・	新得署と決めた定時連絡時刻。ビバーク中のガイドから新得署への連絡はなし。
	22時15分頃・	救急車が短縮コース登山口に到着する。
	23時00分頃・	新得署からビバーク中のMガイドに電話を入れるが、電波不良のためか不通。
	23時45分頃・	新得町が道を通じて正式に自衛隊へ救助要請をする。
	23時50分頃・	前田と男性客Bがトムラウシ温泉コースを自力下山、林道に出たところを車に拾われ短縮登山口へ。
７月17日(金)	00時55分頃・	男性客C、女性客Eがトムラウシ温泉登山口に自力下山。２人は当初戸田と３人で下山しはじめたが途中で離れたと話す。
	１時10分・	自衛隊員が新得署に到着する。
	３時30分・	下山をした女性客らからツアー客が離れ離れになった様子が語られはじめる。
	３時53分・	警察、消防署員の各３人計６人が短縮コース登山口から合同捜索を開始する。
	４時00分・	道警航空隊、自衛隊のヘリコプターなど３機が捜索を開始する。
	４時38分・	道警ヘリが前トム平で意識不明の女性客１人を収容。
	４時45分・	下山途中で仮眠をした戸田がトムラウシ温泉登山口に自力下山。
	５時01分・	道警ヘリが前トム平で意識不明の女性客１人を収容。
	５時16分・	道警ヘリが前トム平付近で自力歩行が可能な真鍋、さらに意識不明の女性客１人を発見。
	５時35分・	道警ヘリがトムラウシ分岐付近で意識不明の男性客１人を収容。
	５時45分・	道警ヘリが北沼西側付近で手を振っている２人、倒れている２人を発見する。
	６時31分・	道警ヘリが南沼キャンプ場付近で寝袋にくるまっている意識不明の男性１人を発見。
	６時50分・	陸上自衛隊ヘリが、Mガイド、Tガイド、男性客１人、女性客４人を収容。うちTガイド、女性客３人が意識不明。
	９時36分・	陸上自衛隊ヘリが南沼付近で単独登山者の男性(64歳）の遺体を収容。
	10時00分までに	単独行者含む９人の死亡を確認。午前６時頃から相次いで遭難者（計７人）が搬送された十勝管内清水町の清水赤十字病院の医師らによると、「遭難者はいずれも下着まで濡れて、体は冷え切っていた。７人全員が足などに複数の青あざがあり、強風にあおられて岩場で転倒したのではないか」、また「最初に搬送された男性には強心剤投与や心臓マッサージなど20分ほど治療をほどこしたが、蘇生しなかった」と25日付の北海道新聞にコメントが掲載された。
	10時44分・	コマドリ沢付近の雪渓で最後まで行方がわからなかったSガイドが倒れていたのを登山者が発見、110番通報。意識あり、自分の名を告げる（救助隊が見つけられなかったのは？）。
	12時00分・	道警がすべての捜索活動を終了。
７月18日(土)		司法解剖の結果、ツアー客7人とTガイドの死因はいずれも低体温症による凍死と判明（単独登山者は司法解剖していない）。死亡推定時刻は遭難翌日の17日未明だった。

ロックガーデンを登り、化雲岳方面をふり返る

この表は８月20日時点の新聞報道・取材をもとにまとめた

■トムラウシ遭難事故 ツアー登山の背景

まず前頁までの「事故までの行動概要」に目を通していただきたい。

低体温症により亡くなった10名のうち、9名がトムラウシ山で命を落としている（1名は美瑛岳）。そのうちの8名が、創業1991年のアミューズトラベル社が応募した「大雪山　旭岳からトムラウシ山縦走」ツアー登山の参加者だ。

ツアー行程を簡単に説明すると、13日▼新千歳空港に集合、買い出しを済ませて旭岳温泉に宿泊。14日▼旭岳ロープウェイを使って入山し、旭岳、間宮岳、北海岳を経由、白雲岳を往復して白雲岳避難小屋泊（12・5キロ、8時間）。15日▼忠別岳、五色岳を越えてヒサゴ沼避難小屋泊（16・5キロ、10時間）。16日▼トムラウシ山を越えてトムラウシ温泉登山口へ下山、トムラウシ温泉泊（12・5キロ、10時間半）。17日▼新千歳空港から各空港へ帰京、というもの（ツアーの応募概要は表1参照）。

ツアーの人数は、愛知・広島・山口・岡山・岐阜・静岡・宮城から参加した15名のツアー客と、北海道・愛知・広島・ネパールのガイド4名（うち1名ガイド補助）、合わせて19名。山行最終日の16日、ツアー客15名のうち、実に約半分の7名と、ガイド1名の命がトムラウシ山で失われたことになる。

■ツアー登山のメリット!? 登山ブームとツアー登山

「ツアー」と「登山」の言葉のあいだに〝観光〟や〝旅行〟という言葉が見え隠れする「ツアー登山」。年々山の奥深くまで足をのばすようになったツアー登山を「このままではいつか……」と危険視する声は少なくなかった。山に登るという行為は、準備も含め、人任せにするものではない。個々の体力・技術・山に対する気持ち（心の準備）が大切だからだ。

今回の事故は、90年代からはじまる中高年登山ブームに乗って、需要をのばしてきたツアー登山業界と利用者に対し、「登山とは何か」という問題を投げかけるものとなった。

それでも、「事故を起こした会社が続けるかはしらないが、ツアー登山そのものは需要があるのだからなくならんよ。だからこそツアー登山というものをきちんと考えていかなければいけない」と、戸田新介さん（65歳）。今回のツアーに参加して自力下山をしたひとりだ。

戸田さんの言葉のとおり、8人の命が失われた今も、アミューズトラベル社はトムラウシ山ツアー以外の夏のツアー登山を実施している。すでに申し込みを終えているツアー客から、「今からでは他のツアー会社の山行には参加ができないからツアーを実施してほしい」との要望が多く寄せられたからだ。

戸田さんは、32歳ごろに山登りをはじめた。テントを背負い、甥の荷物を背負って2人で行くこともあったが、ほとんどが単独、日本アルプスによく出かけていた。戸田さんがツアー登山を利用するようになったのは、仕事が忙しくなったからだ。平日は仕事で動き回りながら週末のツアー登山に参加するようになった。

「荷物をそろえるだけで、なんの予備知識も身につけずに行かれる。ツアー登山のよさはそこにあると思っていました。今回も2日前に荷物を揃えたていたらく……。でも、やはり山に行くにはこれではいかん、改めてそう思いました」と、山行前の自分を振り返る。

「だけど、自己責任論が亡くなられた人に対して唱えられることには、『ちょっと違うぞ』と思っています。

不可抗力の要素はあると思いますが、それに対する一定のサポートは、ツアー登山主催者側からあってしかるべきだと思います。それがツアー登山だと思います。突然サバイバルの場に連れてこられて命を失ってしまった人たちに代わって、『それは違うぞ』と訴えたい。

どうして8名もの命が失われることになってしまったのか、自分には知らせる義務があると思っています。

それから、低体温症の知識です。ガイドたちに低体温症の知識があったとは思えません。自分にその知識があれば、もっと早くに対策を要求できた。それが悔やまれます」

■原因はどこにあったのか ツアー登山の中身

事故のあった山行3日目の16日、雨のなか、朝5時30分にツアーは出発する。稜線に出るまでの急な雪渓を一行が登り終えると、ガイド補助はヒサゴ沼避難小屋に戻り、ここからガイドは3名となる。

ガイド補助が避難小屋に残ったのは、自社のツアーのための場所取りと引き渡す装備の管理があったからだが、ここに今回の遭難におけるひとつの要因がある。

小屋に置いていった装備は、10人用テント、シート、コンロ、ガスカートリッジ、鍋など山行に必要なものばかり。実は、この日の午後には次のツアーが別ルートからヒサゴ沼避難小屋に到着し、この装備を使用することになっていた。

事故のあったツアーは1人15万2千円×限定15人。これだけで228万円の金銭が動く。翌日にヒサゴ沼避難小屋泊のツアーは14万6千円×限定15人で219万円。ここから諸々の経費が落とされるとはいえ、大金が動くことには違いない。

調べてみると7月下旬には、ヒサゴ沼避難小屋に、26、27、28、29日と入れ替わり立ち替わりアミューズトラベル社の4つのツアーが連日泊まる設定になっていた。前記と同じくひとつのツアーで200万円以上が動くと考えると……。北海道のツアー登山が「ドル箱」といわれるゆえんだ。事故時と同じように、装備の受け渡しを山中で行う予定があったかはわからないが、同一会社のツアーが、連日にわたり避難小屋を宿泊施設のように利用するという現実に愕然とする。

避難小屋というのは本来、必要な装備を自分で背負って山に向かう登山者が、緊急に避難する場所として設けられたものである。これでは、避難小屋をツアー団体で利用するという行為そのものに、苦言を呈したくなるのが登山者側の心情だ。

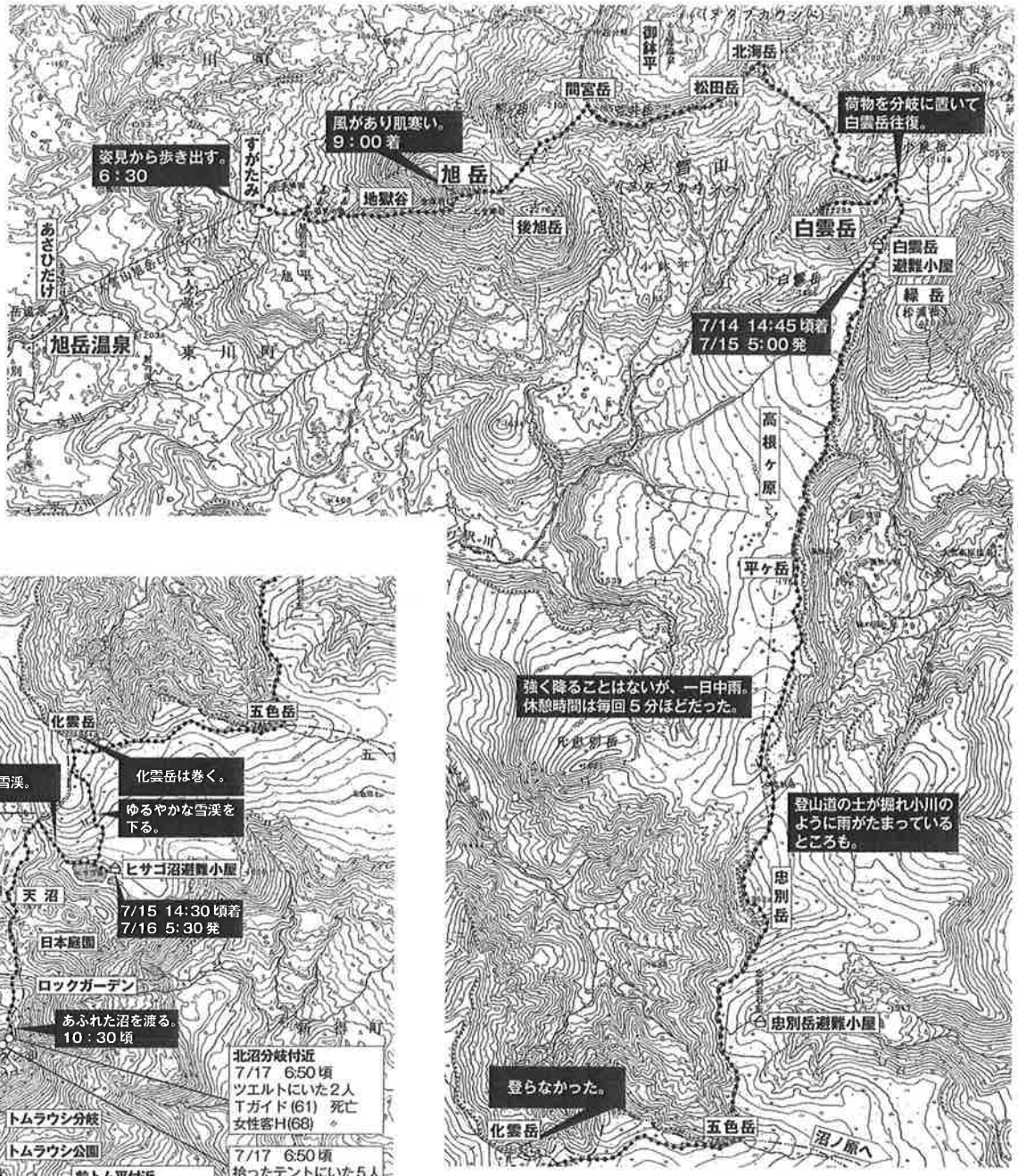
ツアー会社は、トムラウシ山を、

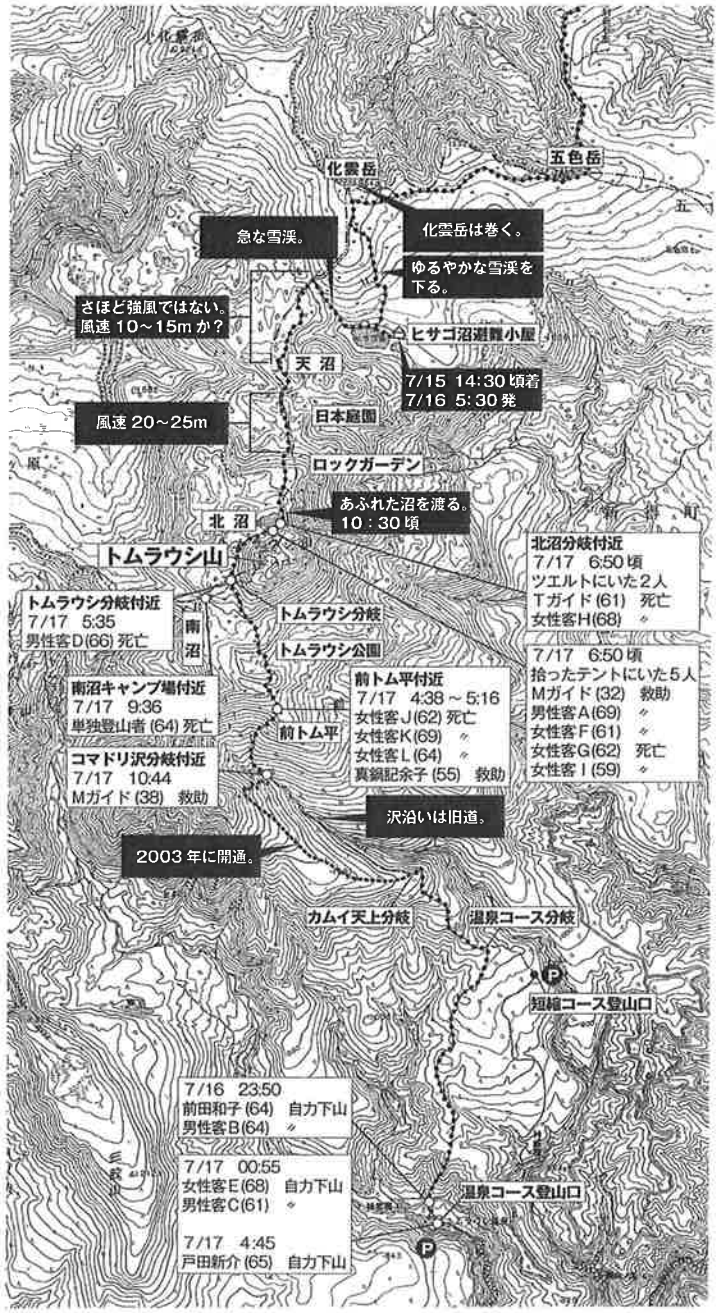
表1

「大雪山　旭岳からトムラウシ山縦走」ツアー応募概要

体力度★★★★（やや健脚。歩行距離、歩行時間、標高差が比較的長くて大きいコース。★5つが最高位）。
技術度★★（やや難しい。クサリ場、ハシゴ、雪渓等の危険個所があるコース。★4つが最高位）。
参加条件は70歳以下であること、過去1年以内に「体力度★★★」以上のツアーに参加した人。限定15名。寝袋と食糧の準備運搬は各自。お湯はスタッフが用意する。
各無人小屋の混雑状況によってはテント泊になる場合もある。
参加費15万2千円。
※参考までにアミューズトラベル社の★★★★★のツアーは、「幌尻岳・戸蔦別岳縦走」「飯豊連峰縦走」「雪倉岳から栂海新道」「高天原温泉から赤牛岳・読売新道」などがある。

岩の積み重なりがトムラウシ山の特徴。ナキウサギなど貴重な動物が生息する





国土地理院発行の5万分の1地形図「大雪山」「旭岳」「十勝川上流」から作成

ヒサゴ沼は昔から登山者のオアシス。今回の事故を嘆き、いっそのことヒサゴ沼避難小屋(154頁の下地写真)を撤去すべきだと口にする登山者も多い。161頁まで写真＝高桑信一

〝振れば金出る打ち出の小槌〟としか見ていなかったのではないだろうか。トムラウシ山だけに言えることではないが、百名山に選ばれたことを誇るべき山々の、これは悲劇である。

■会社第一のツアー計画 押し出し型ツアーの実態

問題なのは、この装備の受け渡しだ。15人の客の命を預かりながら、ビバーク用具すら心もとない状態で、悪天候のなか一行はヒサゴ沼避難小屋を後にする。いや、後にせざるを得なかった。

ヒサゴ沼避難小屋の収容人数は30人。停滞すれば、自社2つのツアー客とガイドら約40名で小屋は埋まる。テントはあるが、炊事道具が1ツアー分しかなければ、食事の準備等すべてに手間取るようになる。

ツアーからツアーへの面倒な装備の受け渡しを、会社側にとって楽な効率重視・経費削減型にしたことで、客がいるにもかかわらず、登山の基本である標準装備の不携帯という事態を招いた。それだけではなく、天気が悪くなれば〝トコロテン式〟押し出し型ツアー日程のプレッシャーがガイドにのしかかってくる。

こうなると、「天候不順なのに、ラジオの気象通報で天気図をとらなかったのか」、「アマチュア無線機は携行していなかったのか」という疑問や、「予備日の設定があるかないか」という以前の話にもなる。

さまざまなことが、山登りの常識から懸け離れてはいないだろうか。会社側のツアー形態に最悪の結果を招く要因があったことは否定できない。

「事件は会議室じゃない、現場で起きているんだ」。ドラマのワンシーンではないが、刻一刻移り変わる自然のなかで、極限の判断を強いられるのはガイドと客だという認識を、ガイド個人はもちろん、ツアー会社自体も肝に銘じなくてはいけない。

■バラバラになった19人 人数が多すぎるのではないか

ガイド3人＋ガイド補助1人＋客15人＝19人。ガイドと客の比率は同一に近づくほど安全率は高まるが、合わせて19という人数も多すぎる。

ツアー客の人数が多くなれば、個々の体力の差は開きやすくなる。また人数が多いほど、スピーディーさを求められる悪場の通過では時間がかかり、メンバー全員が危険にさらされる時間も増す（雷や暴風雨時、落石・雪崩地帯の通過、危険動物との遭遇時、負傷者発生時など）。

ガイドは、お互いの性格、体力、技術がわからないツアー客をまとめる立場にある。それもガイドに求められる能力のひとつだが、人数が多くなるほどそれは難しくなる。

また、ガイド3人の意思の疎通はどうだったのか。事故当日の一連の流れを見る限り、ガイドが連帯感をもってパーティーをまとめていたようには思えない。最悪の状況のなか、ガイドがまとまらずして、15人のツアー客をまとめられるはずがない。

引き返すことを選択肢から外したならば、歩くにせよビバークするにせよ、18人がひとまとまりになって行動するべきであった。しかし、ビバークするには心もとない装備。こうなると、小屋に残してきた装備が悔やまれる。

ツアー一行は、ビバークする7名と下山する11名に分かれてしまっただけでなく、下山に向かった11名がさらにバラバラになった。バラバラになってしまったことで、登山道上に点々と4人が力尽きてしまう結果になった。言い方を替えれば、一行はバラバラになってしまったのではなく、ツアー主催者であるガイドたちが「バラバラにしてしまった」といえる。

■なぜ引き返さなかったのか いくつかの理由

稜線を抜ける風は強かったが、当初は歩けないほどではなく、5分ほどの休憩を数回取りながら進んだ。日本庭園にさしかかる頃からロックガーデンにかけて、風速毎秒20～25㍍の風がツアーを襲った。とくに風が強かった日本庭園付近の木道では、「飛ばされて木道から落ちないように、風が吹く方向にむいてしゃがみ、木道の片側の縁を両手でつかんでじりじりと横歩きで進んだ」。

参加者のひとり、前田和子さん（64歳）は山登りをはじめて16年。「私は初心者なので、月4回は山に行くと決めています。だから日帰りの里山には数多く行っています。長期の山はツアーが中心で、百名山はまだ50山くらい。参加者のなかで一番少なかったのではないかと思います。ツアーに行く前はとくに緊張します。出発前の数日間はお肉やニンニクなどスタミナ食を意識してたくさん食べています。体調管理など自分でできることには気を配るようにしています」と話してくれた。

＊

風速20～25㍍の風のなか、遅々として進まなかったにもかかわらず、なぜ引き返す判断を下さなかったのか。避難小屋を出発して歩き出したからには、ここが大きな分かれ道だったことは明らかだ。

前述のとおり、ガイドには自社の押し出し型ツアー日程のプレッシャーがあったと思われるが、悪天時に耐えられる肝心なビバーク道具を小屋に置いてきたからには、会社側の思惑がどうであれ、「引き返す」という選択肢を最重要として考えておかなくてはならなかったはずだ。

低体温症（156頁参照）の怖さを知らず、慎重さにかけたことが、8名の命を失う直接的な要因だとは考えられるが、メインガイドが32歳、サブガイドが38歳であったことも、先に進むことを選択した理由のひとつではないだろうか。

客は55～69歳で彼らの親世代にあたる。彼らはその年齢差をどれだけ重要視できていたのか。自分の体力を基準に行動したとしたら、そこに大きな誤差が生じる。相手は年の離れた〝ツアー客〟。基礎体力が違う。亡くなった61歳のガイドが、早い段階で体力的な違いに気づき、引き返すことを助言できていたなら、事態は変わったに違いない。

＊

悪天候のなか、メンバーが動けなくなった場合には、少なくとも一晩を明かすことのできるビバーク道具（テントやツェルト、コンロ等の燃料や食糧）がパーティーにあるか否かで、生死の行方は大きく分かれる。

ガイドはツェルトを持ってはいたが、テントやコンロ類を携行していれば、気持ちに余裕がうまれたかもしれない。

少しでも風の弱い場所にテントを立て、ツアー客全員をそれぞれ収容し、たとえ足をのばせなくても身を寄せ合い、暖を取り、天候が回復するまで体力を温存しようという考えが生まれたかもしれない。強風時の設営には注意を要するが、風に弱いツェルトよりもテントのほうが、ビバーク経験のないツアー客にとっても安心感が大きいだろう。

ヘリから映された救助時の報道映像にはテントが映っていたが、これはツアー一行のものではない。南沼

キャンプ場付近にデポされていた登山道整備業者の非常時用テントを、Mガイドが偶然に見つけたものだ。このテントのほか、暖を取り温かいものを口にすることができるコンロが一緒にデポされていた。

実は、歩ける客10名（1時間以上の待機中に低体温症にならなければ歩けるはずだった10名）をつれて下山にかかったサブガイドの荷物には、4人用テントが入っていたという。しかし、そのテントを役立てることはないままに終わった。

■生死をわけたものは何か 生存者の話から見えてくること

雨具や着ている衣類が登山用ではなかったのではという情報が流れたことに、「そんなことはない。みんな登山用の雨具であったし、服装も、下着まではわからないけれど、登山用のシャツやズボンだった」と話を聞いた参加者は口を揃える。写真を見せてもらったが、服装におかしなところは見受けられなかった。

気になるのは前日の雨。衣服が濡れた者が多かったが、「着干し」する人がいたという。濡れた衣服を着干しする登山者は多いが、なかなか完全には乾かない。湿った服を着、強風時に1時間以上も行動を停止、待たされたとすれば、低体温症にかかる確率は断然高くなる。

「避難小屋は身体を休められる場所ではなかった」という声もあったようだが、縦走路途中にある避難小屋は、多少風雨が吹き込もうとも登山者にはありがたい存在のはずだ。避難小屋が身体を休められる場所ではないのだとしたら、大雪の山は、営業小屋泊まりに慣れたツアー客が来るべき山ではなかった、そういえるのではないだろうか。

「天気が悪かったこともあるけれど、前日も事故のあった日も、1回の休憩時間が5分ということで、みんなが食べ物を口にできていたか、こうなった今、気になっています。5分という短い時間に、行動食を食べるのか、寒さ対策に上着を着るのか、何をするのか人それぞれですが、風雨のなかの短い休憩時間では、体力的にも精神的にも余裕がなければ何もできないで終わってしまう。エネルギー補給がじょうずにできないまま、体力の消耗が早くなり、低体温症になってしまったのではないか」。真鍋記余子さん（55歳）が語ってくれた。

ガイドの指示はなかったが、戸田さん、前田さん、真鍋さんとも自分で考え、小屋を出る時に、飴やチョコ、カロリーメイト等の細々した行動食を雨具などのポケットに入れ、すぐに食べられるようにしていた。

戸田さんは言う。「ツアー客はみんな烏合の衆。遠慮とお客意識がある。それもみな『ツアー』だから。体調が悪くても、みんなに迷惑がかかるからなかなか言い出せないものです。個人が意見を言いはじめたらツアー登山は成り立たない。だから、自分を前に出すのではなく、ガイドを信じてついていくんです。でも、今回は裏切られた感が否めない」

アミューズトラベル社で配られる装備表では、地図やコンパス、ライターやマッチが「あれば便利なもの」と表記され、必携装備ではない。ここに疑問をもたない参加者は、「山に登る資格がない、登山者とはいえない」とも言えるが、「そこまでガイドに頼ってもいいのですよ」とツアー会社がいっているようなものだ。

「アミューズのガイドは若い人が多いためか歩幅は広く、段差のある個所などの歩き方も後続のツアー客を考えたものではないです。だから、ガイドは『道案内人』であって、命をあずける人ではないのだなと日頃から思っていました。歩くルートは教えてもらうけれども、他のことは人頼みにはしない。

ガイドについて遅れまいと必死に山を下りているときの自分を思い出すと、ゾワゾワと……。今も鳥肌が立ってきます。あのときの自分は、自分でいて自分ではなかった。必死でした。ものすごい集中力で、極限状態になると私はこうなるのかと。ふだん目に入らない道標や道しるべの赤印、つまずきそうな登山道上の石が鮮明に、次々に目に飛び込んできました。太陽がこっちに見えているからこっちが東だなんて、いつもの自分が考えもしないことが頭をよぎっていました。極限状態になったあの日の私は、すべての感覚が前向きに働いてくれた。だから下山できたのだと思っています」と前田さん。

■ガイドの登山センス 経験と実績の先にあるもの

「トムラウシ山経験者のガイドは1人」と報道で取り上げられたが、今回のルートに関していえば、登頂回数は関係ないだろう。

多くの登山者が、毎年トムラウシ山を無事故で縦走している事実を忘れてはならない。彼らにはガイドなどいないのだ。本来の登山は、自分と仲間の体力・技術を考え、山やルートを調べ、自らの手でひとつひとつ準備していくもの。山に登るというのはそういうことだ。

山の経験年数が少なく、若かろうが、ガイドはガイドである。年齢に関係なく、客の命をあずかる仕事に変わりはない。客を山に連れてきたからには、「わからない、初めての山だから」は通らない。初めて向かう山域ならばなおさら、山に対して慎重に、謙虚になるべきだ。ツアー前には、大雪山とはどういう山なのかと調べる努力をすべきではなかったのか。

ガイドは、客にガイドと名乗ったからには、ガイドとしてお金を得ることのプライドとプレッシャーを持って山に臨むべきではないだろうか。趣味と実益を兼ねたアルバイトでは決してない。荷物持ちとも違う。

ガイドには多くの能力が求められる。真に求められるものは、机上の知識ではなく、ガイド個人の実力・登山経験だろう。登山センスはもちろんのこと、寄せ集めのパーティーをまとめ、管理する才覚も必要にな

参考資料

2004～2008年の6月～10月における遭難事故者数と死亡者数と死亡者の平均年齢

- 北海道事故者43人中、死亡者18人で、死亡者の平均年齢57.38歳
- 北ア北部(剱・立山・鹿島槍・栂海新道)事故者164人中、死亡者50人、平均年齢58.08歳
- 北ア南部(穂高・槍・燕・鷲羽・黒部五郎)事故者142人中、死亡者56人、平均年齢54.08歳
- 南アルプス事故者79人中、死亡者18人、平均年齢57.44歳
- 中央アルプス・乗鞍・御嶽事故者45人中、死亡者6人、平均年齢57.83歳
- 八ヶ岳事故者41人中、死亡者5人、平均年齢60.4歳

※「山で死んではいけない。」山と溪谷社刊を参考にデータをまとめた

る。問題発生時にはとくにその手腕が問われるのがガイドだ。

トムラウシでの事故は、低体温症により歩けなくなりはじめた女性客への対応、長時間吹きさらしのなかを待たせた客への対応、救助要請等、すべてにおいてツアー主催者側の状況判断が甘く、遅かった。

繰り返してしまうが、ガイドが3人いながら、どうして8人もの死者が出たのか。ツアー会社は、ガイドというポジションをどう捉えて育成していたのか。なにをもってガイドとして山に派遣していたのか。客の命をあずかるガイドの重圧と責任に対して、ガイド料をいくら支払っていたのか。ツアー会社に聞いてみたいことは山ほどある。

できることなら、ツアー会社関係者には、年に数回〝実施研修〟を行い、人気の縦走コースを歩いていただければと思う。どんな行為が危険なのか、まわりに迷惑なのか。オフィスを出て、登山者のひとりとなって山に向かえば、ツアー登山の現状がわかるだろう。客を連れて行くガイド側の苦労も、身近に感じられるのではないだろうか。

■事故から1カ月以上が経過 それぞれの動き

アミューズトラベル社から7月29日付で、「第三者調査委員会設立のご案内」が参加者に送られた。事故の原因究明を最優先に、公平中立に調査・事故報告書の作成にあたるために第三者調査委員会を設立、人選が決定し次第、再度知らせるとあったが、現段階では社内の有識者で「安全山行委員会」を8月4日に立ち上げたにとどまっている。

道警は7月18日、業務上過失致死容疑でアミューズトラベルの東京本社など2カ所を家宅捜索、関係書類を押収した。また業務上過失致死での立件を視野に、生存しているガイド2人と松下政市社長らから事情を聞き、惨事が起きた原因を調べている。8月26日にはヒサゴ沼避難小屋付近と北沼付近の実況見分を行ったが、生存しているガイド2人は体調不良などの理由で立ち合わなかった。道警は、9月には2人のガイドを伴い、一行がたどった経路や救出された地点などをあらためて確認、ガイドの判断が適切だったのかどうか調べる方針だ。

また日本旅行業協会は、トムラウシ山の遭難事故を受け、「ツアー登山運行ガイドライン」の見直しに取りかかり、業界としてツアー登山のガイド育成にも力を注いでいくという。

＊

亡くなったツアー客を介抱した男性客Aさんは、眠りが浅い日が続き深夜に目覚めてしまうという。届いた手紙には、迷惑をかけましたという事故への深く長い詫び状の後に、「(略)事がおきました五～六時間前の朝、いつものようにストレッチ体操をして、出発しての出来事でした。山行で雨風にあった事は数多くあり、何故あのような多数の死者が出てしまったのか。今もって信ずることができません。『山のタタリ』『山の神様にイカリを買った』としか思えません。(略)山に対する考え方、自然に対する考え方、人間として目の前で起こった出来事にどう対処するのか。(略)〝体力と精神力〟これにつきるのではないかと個人的には思っています。どのような山行でも自分一人が頼りです。人に迷惑をかけない山行を心掛けたいと思っています。(略)」と綴られていた。

楽しいことも苦しいことも、出来事は「いつものように」はじまる。私たちは、それを忘れてはいけない。

最後に● トムラウシ山は危険な山なのか 神々の遊ぶ庭に 新しい避難小屋はいらない

山というものは、そもそも「不便」の象徴だ。不便ゆえに残された自然、それが〝山の良さ〟だ。それを求めていくのだから、そこに便利さを求めること自体、そもそも本末転倒である。当然ながら、自然(登山)にはリスクがつきものだ。山(人為の及ばない自然)にあこがれ、自身の充実と充足を求めていくのだから、確固たる安全を求めるのもまた本末転倒である。結果として、それがツアー登山であったとしても、最後は自分の身は自分で守るしかない。

私たちは自然のなかに行くということの現実を、どれほど理解しているだろうか。登山者はみな、山に対して「登山客」であってはいけない。山に登るには、体力と精神力、なにより心構えが必要だ。ルートを考えるのも、装備をそろえるのも、交通手段を調べるのも、体力を養うのも、そのすべてが山に登るということのプロセスだ。

今回の事故をうけ、新しい避難小屋建設の話が浮上したが、果たして必要だろうか?

旭岳からトムラウシに向かうルートには、すでに3つもの避難小屋がある。ヒサゴ沼からその先の美瑛富士までは避難小屋こそないが、水の取れるキャンプ指定地がある。

テントを背負い、自らの力で頂に立ち、越える魅力がトムラウシ山にはある。むしろ、トムラウシ山はじめ多くの山々の魅力は、そこにこそあるのではないだろうか。

もう何十年にもわたり、数多くの大学ワンゲル部・山岳部、山岳会が、夏合宿をはじめさまざまな山行でトムラウシ山を越え、大雪の山々を無事故で大縦走していることこそ、トムラウシを目指す登山者たちが、心に留めておくべき現実だ。

新たな避難小屋建設は、軽装な登山者を増やし、安易なツアー登山を増幅するだけの産物となってしまうだろう。小屋を建てる資金があるのなら、まずすべきは、ヒサゴ沼をはじめ大沼や水場となる沢に流れ込む、し尿問題を解決してもらいたい。

山は、安全が保障されている下界のテーマパークやバーチャル(空想)な世界とは違う現実の世界だ。

いいつくされた言葉だけれど、人間が克服できる自然というものはない。絶対的な安全が保障されたら、それはもはや〝登山〟ではなくなる。観光意識の登山者が、踏み込んではならない〝山〟があるのではないだろうか。

登山者なら誰しも、「自分の力で登ることのできる山」があり、そしてあこがれの「行きたい山」があるだろう。だからこそ、体力や技術、経験を重ねて、あこがれの山に対して自分自身を高めてゆく。それが登山本来の楽しさであったはずだ。

山が好きな者として、今回の事故はいたたまれないものだった。どうして、こうなってしまったのか、本当に残念でならない。いまは過ぎてしまった現実を直視し、そこに潜むさまざまな要因をすくい上げ、問い、考え、学ぶしかない。

山に登る人、山をビジネスとするすべての業種・業界、ともに立場が違うとはいえ、山に向かうひとりひとりが、「山に登るということ」はどういうことなのか、それぞれの立場から考えてほしい。

「カムイミンタラ・神々が遊ぶ庭」大雪山トムラウシが、いつまでも遥かなる山であることを願って――。

記・岩城史枝